

教育等に関するアンケート 報告書 2024

The Report of Learning Outcome Survey 2024



鳴門教育大学



目的	本学の教育の状況についてデマンド・サイドの意見を把握することにより、教育の質の維持・向上及び教育研究体制の一層の充実を図ることを目的とする。			
標本抽出および配布回収方法	卒業・修了年次の学生・院生に対する全数調査。 電子メールまたはQRコードを記した用紙の配布により調査URLを知らせ、Webアンケートフォームを通じて回答を収集。			
実施時期	令和6年度 1 月～ 3 月			
実施機関	総務委員会			
分析機関	教務委員会（が設置した「教育等に関するアンケート分析専門部会」）			
配布・回収数	区分	回答者数	対象者数	回収率
	全体	287	305	94.1%
	学士課程	101	106	95.3%
	修士課程	82	90	91.1%
	専門職学位課程	104	109	95.4%

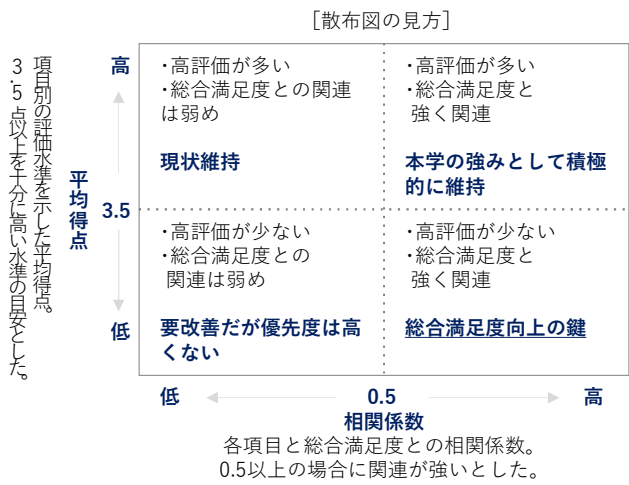
目次	総括	3
	回答データ		
	01 回答データの要約	4
	02 入学前の状況	5
	03 入学動機	6
	04 教育レベル	7
	05 教育内容	8
	06 必修授業時間	9
	07 教職実践力に関する科目	10
	08 ゼミ活動	11
	09 教育環境	12
	10 大学教員	13
	11 学生支援	14
	12 本学で学んだ成果：教育内容に対する理解	15
	13 具体的な成果：社会で活用できる汎用的なスキル	16
	14 具体的な成果：教師としてのコンピテンシー	17
	15 教育の有用性に対する実感	18
	16 卒業後・修了後の進路予定	19
	17 自由記述	20
	参考データ		
	自由記述（原文）	21
	回答者の所属専修・コース名	29

令和6年度と過去4年間の回答を得点化して結果を比較したところ、ほとんどの項目で大学への評価や満足度の向上や高い水準での維持が確認された。低い評価が続いていた項目（教育環境等）にも改善がみられた。調査全体の回収率は94.1%（課程別：91.1～95.4%）と高く、信頼性や妥当性も問題ない結果である。

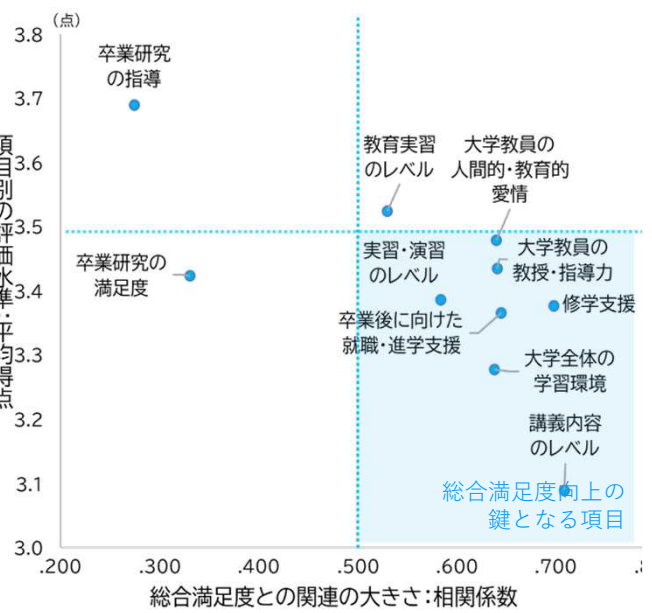
調査を行った各項目を、評価水準を縦軸、総合満足度（「12 教育に対する理解」と「15 教育の有用性に対する実感（or教育内容の満足度）」との合計点）との関連の強さを横軸とした散布図で表すと、全課程で評価が高かったのは研究指導、次いで大学教員（担当教員）の指導や愛情についてであった。自由回答と合わせると、少人数制による丁寧な教育、親切で熱心な指導などが高い評価につながったといえる。

総合満足度との関連が最も大きな項目は、学士課程は講義内容のレベル、修士課程は大学教員の教授・指導力、専門職学位課程は大学教員の人間的・教育的愛情であった。また総合満足度をさらに向上する鍵となり得る項目は、**学士課程**では**講義内容のレベル**及び**大学全体の学習環境**や**修学支援**、**修士課程**では**大学全体の学習環境**、**専門職学位課程**では**修了後に向けた就職・修学支援**や**実習のあり方の妥当感**であった。今年度は**学士課程**及び**専門職学位課程**で、総合満足度向上の鍵となる項目が増加している。各項目や総合満足度の水準が例年と同程度又は高まっていることを踏まえると、**複数の項目内容を改善する多角的なアプローチ**を施すことにより、総合満足度がさらに高まる可能性を示唆しているといえるだろう。

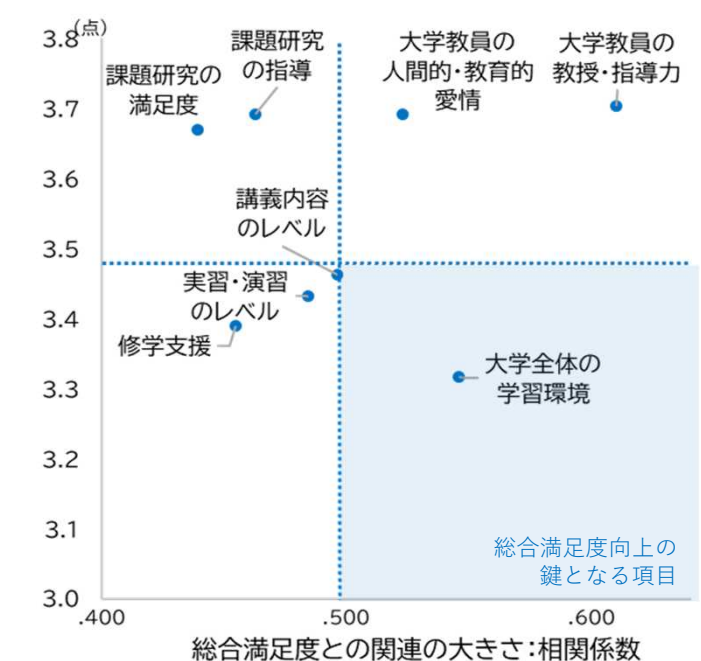
大学全体の学習環境や施設に関する満足度も向上しつつあるが、自由回答にも多く記述されたように**食堂・売店**や**学生寮**に対する不満が大きい。食堂・売店や学生寮の改善は容易ではないが、食や住は生活の基盤であり、市街地から遠い高島で暮らす学生にとって切実な問題である。さまざまな知恵を結集して対策を講じることが求められる。また改善は見られるものの、**院生室**や**学習スペース**に対する不満も一定数見られた。令和7年度より拡充する大学全体での学習スペースやDX環境の充実による効果が期待される。



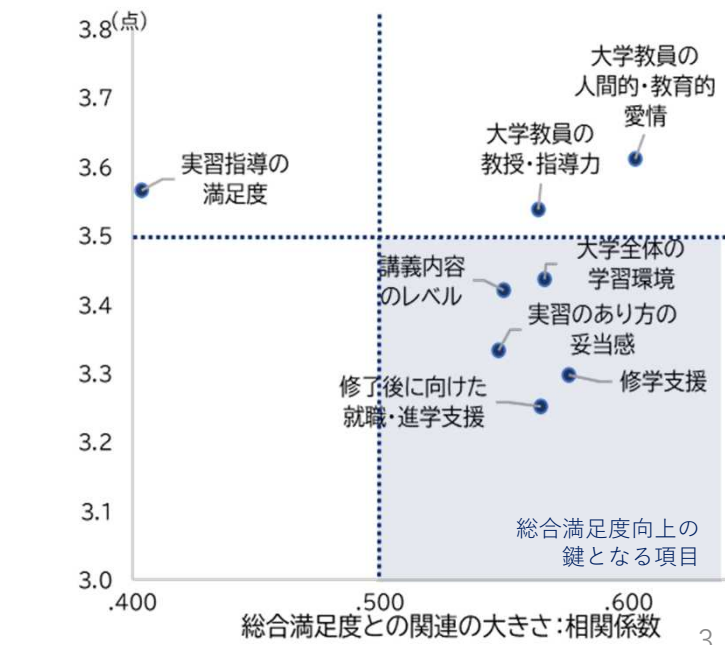
学士課程



修士課程



専門職学位課程



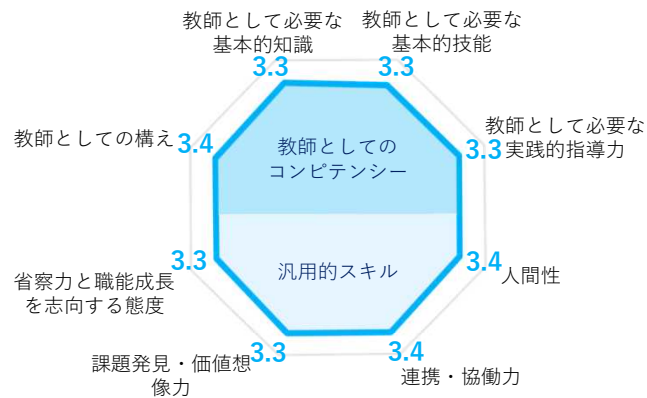
学士課程

「最も当てはまる入学動機」は「教員になること」が80%とここ3年は約8割を占めている。また卒業後の進路は「教員として就職」が77%と非常に高い割合を占め、次点は「本学大学院に進学」が12%となっている。教育に対する満足や有用性を1～4点で得点化して平均を算出した結果は、全体として3.3点以上となった。特に**高かった**のは**教授・指導力**や**愛情**など**大学教員**に対する評価、**就職・進学支援**に対する評価である。

大学教員に対する評価



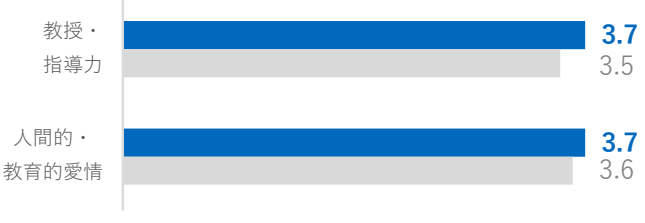
本学で学んだ成果については『鳴門パースペクティブ』*として「**教師としてのコンピテンシー**」4領域と「**社会で活用できる汎用的スキル**」4領域の8領域で評価した。「**教師としてのコンピテンシー**」4領域と「**社会で活用できる汎用的スキル**」4領域のいずれの領域も3.4～3.5点と**高い水準**であり、この指標に基づく八角形のレーダーチャートからは、**バランス良く**育まれたことが示された。



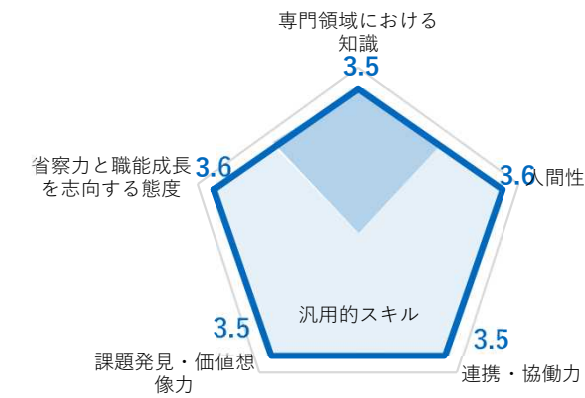
修士課程

入学前の状況は「他大学の学部・研究生」が52%と過半数を占め、修了後の進路は「教員以外の職に就職」が56%と最多であり、「教員として就職」が19%であった。教育に対する満足や有用性を1～4点で得点化して平均を算出した結果は、概ね3.6～3.7点と非常に高かった。学部と同様、特に**高かった**のは**研究指導**や**大学教員**に対する評価であり、**3.7**点以上を示した。過去4年間と比べても非常に高い評価となった。

大学教員に対する評価



修士課程においても『鳴門パースペクティブ』による評価を行っているが、修士課程は教職課程ではないため、専門職としてのコンピテンシーに関連する「**専門領域における知識**」と「**社会で活用できる汎用的スキル**」4領域+1で評価した。いずれの領域及び項目も3.5～3.6点と**非常に高い水準でバランス良く**育まれたことが示された。



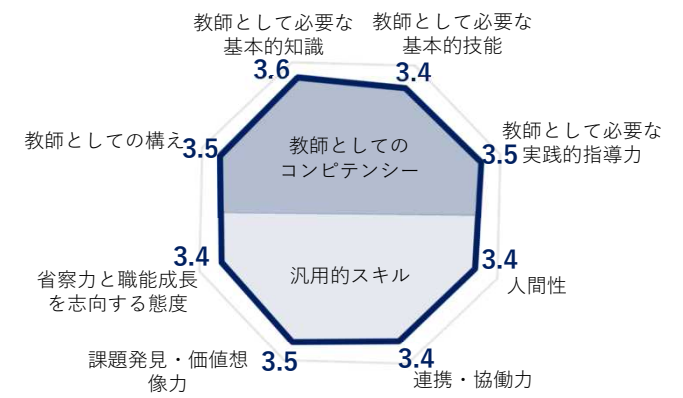
専門職学位課程

「最も当てはまる入学動機」は「高度な教育実践能力を習得する」が近年徐々に増加し、R6は54%と半数を超える。対照的に「教育委員会の推薦」は減少傾向にあり、R6は6%であった。修了後の進路は「現職復帰」と「教員として就職」の合計が90%と大半を占めている。教育に対する満足や有用性を1～4点で得点化して平均を算出した結果は、全体として3.3点以上となった。特に**指導担当教員の指導**や**大学教員**に対する評価、そして**実習指導の満足度**に関する**評価が高く**、**3.6**点以上を示した。

大学教員に対する評価

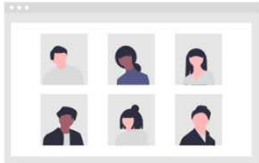


専門職学位課程の『鳴門パースペクティブ』*による評価は、「**教師としてのコンピテンシー**」4領域と「**社会で活用できる汎用的スキル**」4領域のいずれの領域も3.4～3.6点と**非常に高い水準でバランス良く**育まれたことが示された。特に8領域のうち6領域では学位課程よりも0.1～0.3点高くなっている。現職教員が多く在籍する専門職学位課程では、自分の資質や能力に自信をもって、現場復帰してもらえよう、さらなる高みを目指していくことが重要であろう。



*鳴門パースペクティブとは、8領域（26観点）からなる教員に求められる資質・能力を本学独自に体系化したものである。全ての領域が総合満足度と高い相関にある。

「入学前のあなたの状況を教えてください。」に対し単一回答を求め、各年の結果を構成比で示した。

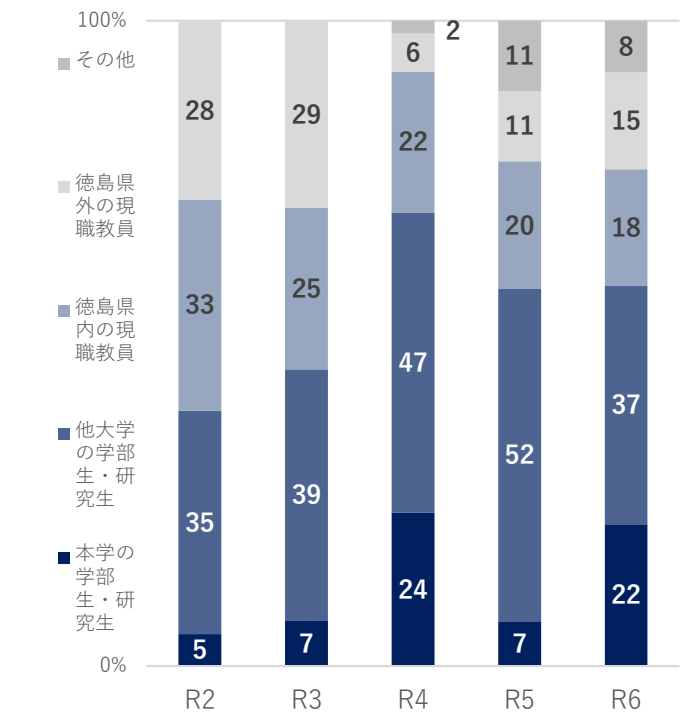
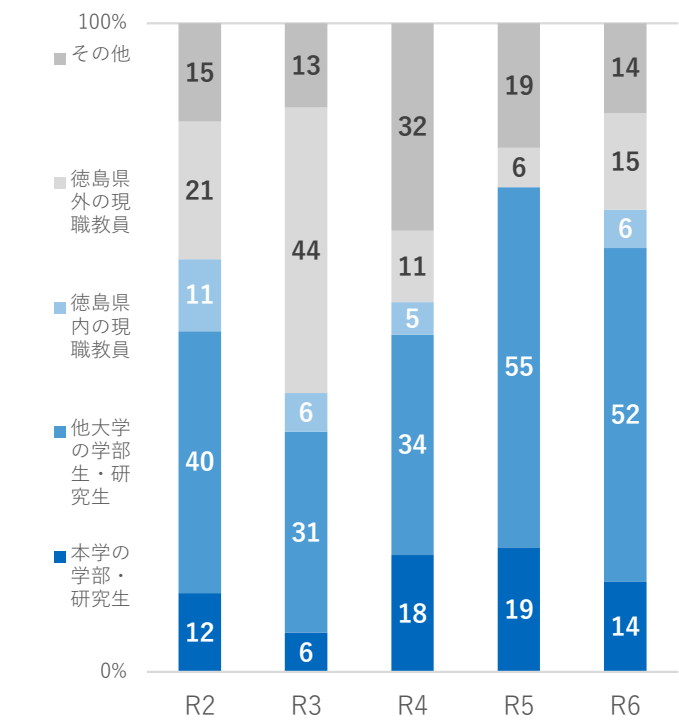


学士課程

修士課程

専門職学位課程

該当する設問なし



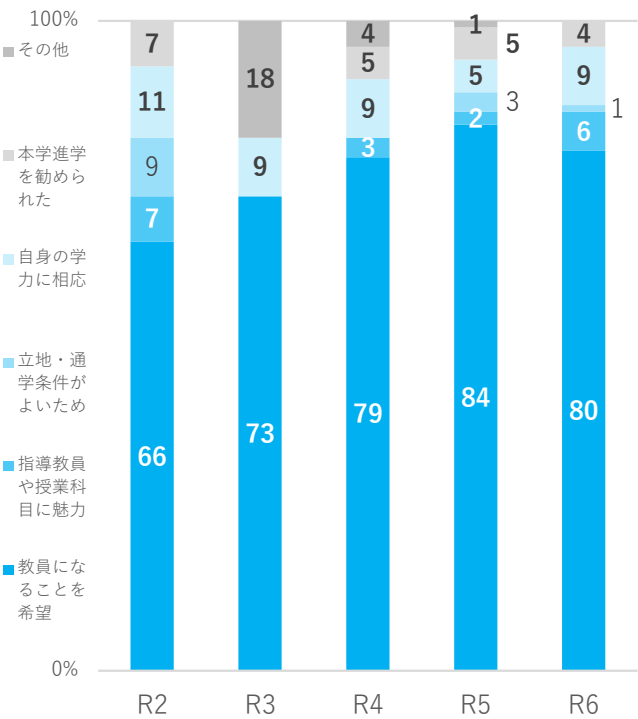
最も多かったのは「**他大学の学部生・研究生**」で52%を占めていた。これは過去5年間ではR5の55%に次いで2番目に高い水準であり、入学者の半数以上が他大学からの学部生・研究生である状況が継続している。
他のカテゴリ、特に「**徳島県内の現職教員**」が6%、「**徳島県外の現職教員**」が15%と、現職教員の割合は両者を合わせて21%と比較的低くなっている。

R6は「**他大学の学部生・研究生**」が37%で最も多くなっている。これは前年度のR5(52%)からは減少したが、R2-R4に近い比率で、高めの水準を維持している。
次に多いのは「**本学の学部生・研究生**」で22%だった。これはR4(24%)に近い割合で、R2-R3およびR5(5-7%)から見ると大幅に増加した水準を保っている。
一方、現職教員（県内・県外合計）は33%となり、R2-R3で50%を超えていた割合から大きく減少し、R4・R5と同様に低い水準で推移する傾向が続いているようだ。

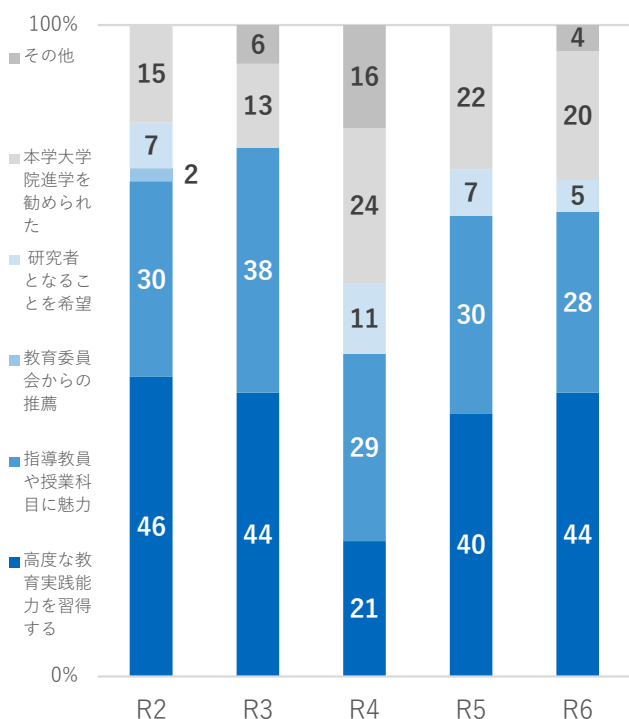
「入学動機は何ですか？」に対し単一回答を求め、各年の結果を構成比で示した。



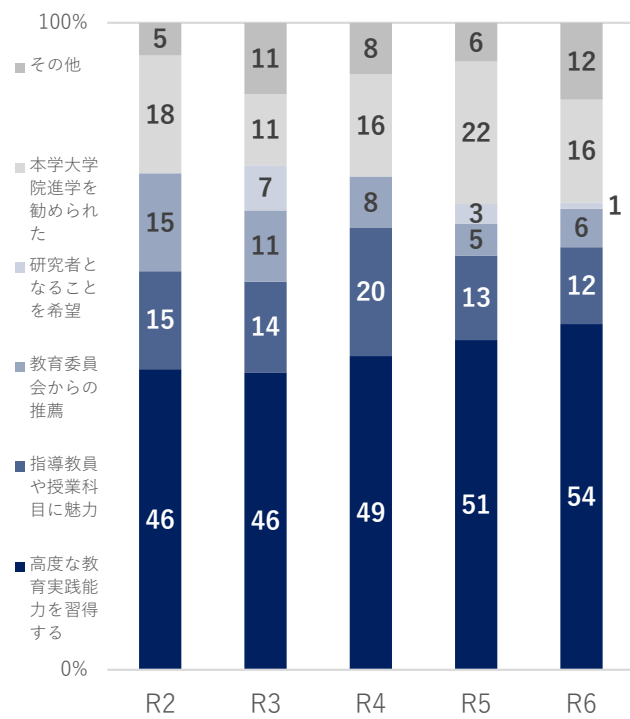
学士課程



修士課程



専門職学位課程



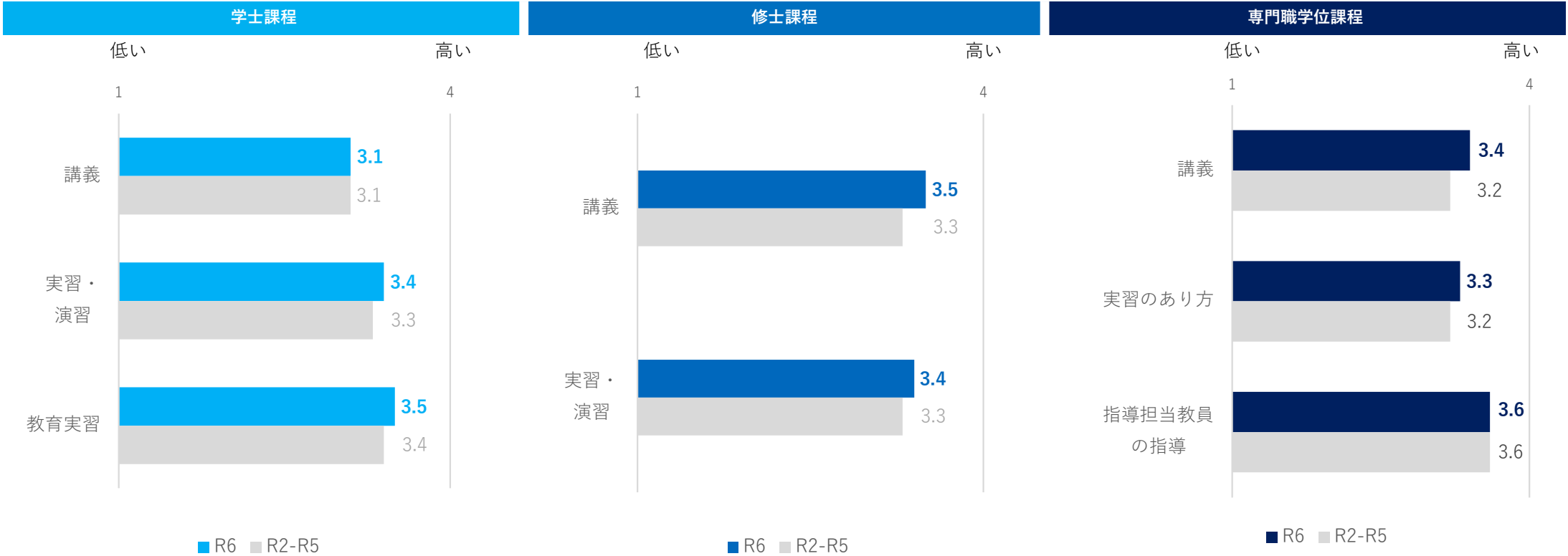
R6の最も多い入学動機は「将来、教員になることを希望していたため」で80%を占めている。この傾向は過去5年間（R2からR6）で一貫しており、特にR4以降は毎年約8割の回答者がこの動機を挙げている。R6の80%はR5の84%よりわずかに減少しているが、依然として教員志望が高い割合を維持している。R6の「本学の指導教員や授業科目に魅力があったから」は6%、「自身の学力に相応した大学」は9%だった。

最も多かったのは「自発的意志に基づく高度な教育実践能力を習得するため」で44%だった。これはR2（46%）やR3（44%）と同水準であり、自発的な動機が引き続き主流であることがわかる。一方、「本学の指導教員や授業科目に魅力があったため」は28%で、過去5年間で最も低い割合となった。「本学大学院進学を勧められたため」は20%を占め、R4（24%）、R5（22%）に次ぐ高水準であり、R2（15%）やR3（13%）と比較して高い傾向が続いている。

R6に最も多かったのは「自発的意志に基づく高度な教育実践能力を習得するため」であり、54%と過去5年間で最高の割合となった。一方、「教育委員会からの推薦」は6%と過去5年間で2番目に低い水準であり、経年的な減少傾向が続いている。これは、教育実践能力の向上を目指す個人の主体的な意志が、入学動機として最も強くなっていることを示唆している。

学士課程・修士課程：講義、実習・演習、教育実習の内容のレベルについて、専門職学位課程：講義の内容のレベル、実習の在り方、指導担当教員の指導について、4件法での回答を求め、「高い」=4点、「どちらかといえば高い」=3点、「どちらかといえば低い」=2点、「低い」=1点として平均値を算出した。

3点以上は、回答の大半が「高い」「どちらかといえば高い」であり、3.5点以上は「高い」が半数以上を占めていることを示す（以降、同様）。



R6の「講義」「実習・演習」「教育実習」全てにおいて、R2-R5平均より高い・又は同水準だった。

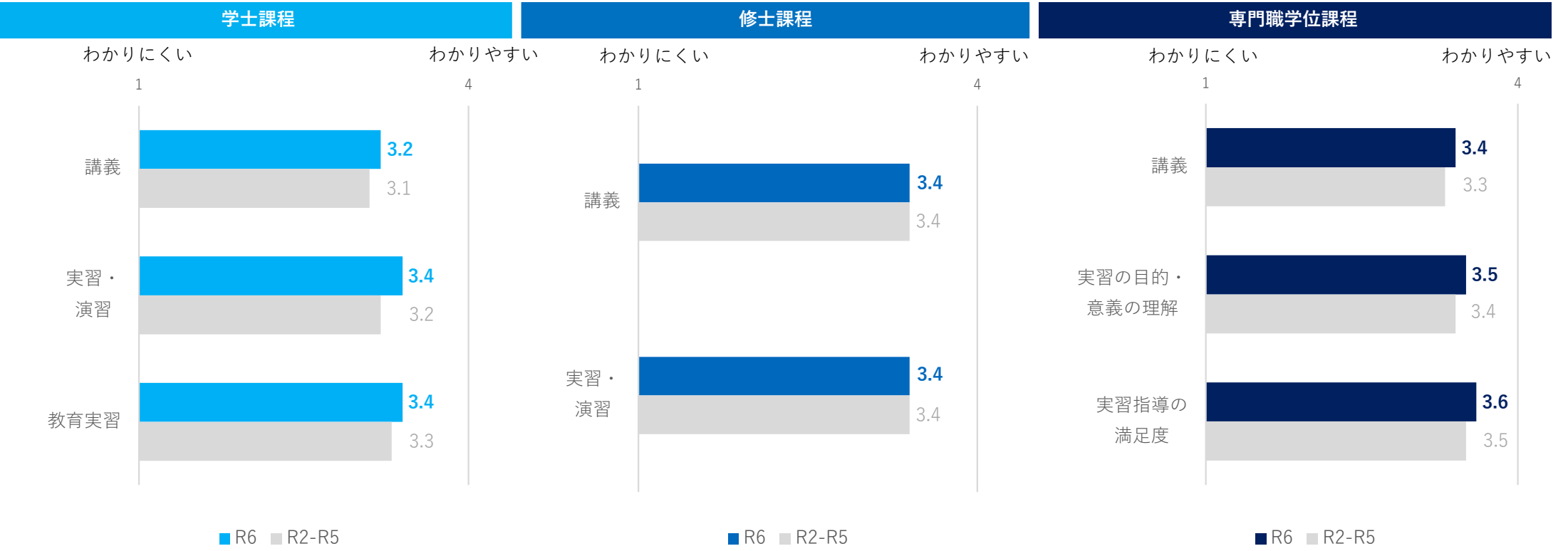
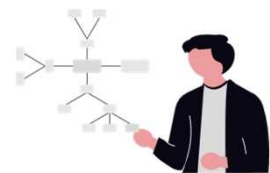
総じて、教育内容のレベルに対する認識に良好な傾向が見られる。

「講義内容レベル」と「実習・演習内容レベル」について、R6の評価は過去平均と比較して上昇している。具体的には、「講義内容レベル」はR6で3.5となり、R2-R5の平均値である3.3から上昇していた。「実習・演習内容レベル」もR6で3.4となり、R2-R5の平均値である3.3からわずかに上昇していた。経年的な推移を見ると、両項目ともR3に評価が一時的に低下したものの、R4以降は回復傾向にある。R6の評価は、過去4年度の平均を上回る水準であり、講義内容のレベルとそれに対する理解度に関する学生の評価が改善傾向にあることがうかがえる。

R6の「講義内容レベル」は3.4点、「実習の在り方」は3.3点であり、いずれもR2-R5の平均3.2点からわずかに上昇している。「指導担当教員の指導」はR6もR2-R5と同様に3.6点と高い水準を維持している。

全体として過去と比較して改善または維持されており、特に教員指導への評価の高さが継続していることが分かる。

学士課程・修士課程：講義、実習・演習、教育実習の内容の理解について、専門職学位課程：講義の内容、実習の目的・意義の理解、実習指導の満足度について、4件法での回答を求め、
「わかりやすい」=4点、「どちらかといえばわかりやすい」=3点、「どちらかといえばわかりにくい」=2点、「わかりにくい」=1点として平均値を算出した。

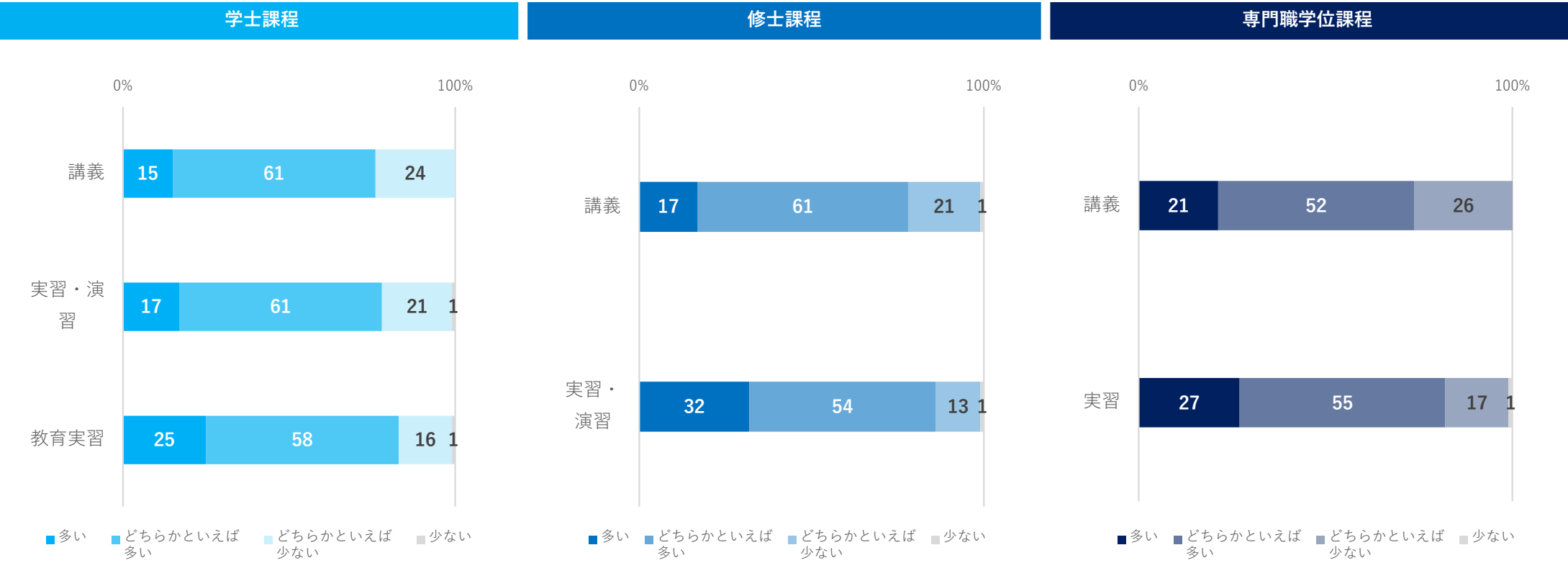


R6の「講義」「実習・演習」「教育実習」全てにおいて、R2-R5平均より高い水準だった。
総じて、教育内容の理解に良好な傾向が見られる。

「講義内容理解」および「実習・演習の内容理解」についてのR6の評価は、いずれもR2-R5の平均と同値の3.4だった。これは、講義や実習・演習を通じた内容の理解度について、R6が過去数年間の傾向から大きな変化がなく推移していることを示しており、現状維持の評価と言える。

R6の「講義内容理解」は3.4、「実習目的・意義の理解」は3.5で、いずれもR2-R5平均よりやや高い水準だった。
「実習指導の満足度」は3.6と、過去平均（3.5）を上回る高い満足度を維持している。
総じて、内容理解度、指導満足度ともに良好な傾向が見られる。

学士課程・修士課程：必修とされる講義、実習・演習、教育実習の時間数について、専門職学位課程：必修とされる講義、実習の時間数について、4件法で回答を求めた。単純な得点化に向かない選択肢であるため、R6年度の回答のみを対象として構成比を示す。



必修科目それぞれにおいて時間数が多いと感じる回答者が多数を占めている。

「必修とされる講義の時間数」は、76%が「多い」または「どちらかといえば多い」と回答。

「必修とされる実習・演習の時間数」は、78%が「多い」または「どちらかといえば多い」と回答。

「必修とされる教育実習の時間数」は、83%が「多い」または「どちらかといえば多い」と回答しており、最も高い割合を示している。

「必修講義の時間数」については、「多い」が17%、「どちらかといえば多い」が61%であり、合計78%が「多い」または「どちらかといえば多い」と回答していた。

「必修とされる実習・演習の時間数」では、「多い」が32%、「どちらかといえば多い」が54%で、合計86%が「多い」または「どちらかといえば多い」と回答していた。

この結果から、「必修実習・演習」の方が、「必修講義」よりも時間数を負担に感じている回答者が多いことが分かる。

「必修講義」と「実習」の双方で、回答者の大多数が時間数を「多い」または「どちらかといえば多い」と感じていることがわかる。

特に、「実習時間数」では82%が「多い」「どちらかといえば多い」と回答しており、これは「必修講義」の73%よりも高い傾向を示している。

「少ない」と答えた割合は、「必修講義」で0%、「実習」で1%と、どちらも非常に低いのが特徴だった。

教職実践力に関する2科目に対して「教育実践コア科目は教師として必要な実践指導力を身につけるのに役立ちましたか」「最終学年に履修した教育実践演習は自らが習得してきた知識・技能を補完・向上させ、教員として必要な資質・能力として有機的に統合・形成されるのに役立ちましたか」、4件法で回答を求めた。「役立った」=4点、「どちらかといえば役立った」=3点、「どちらかといえば役立たなかった」=2点、「役立たなかった」=1点として平均値を算出した。

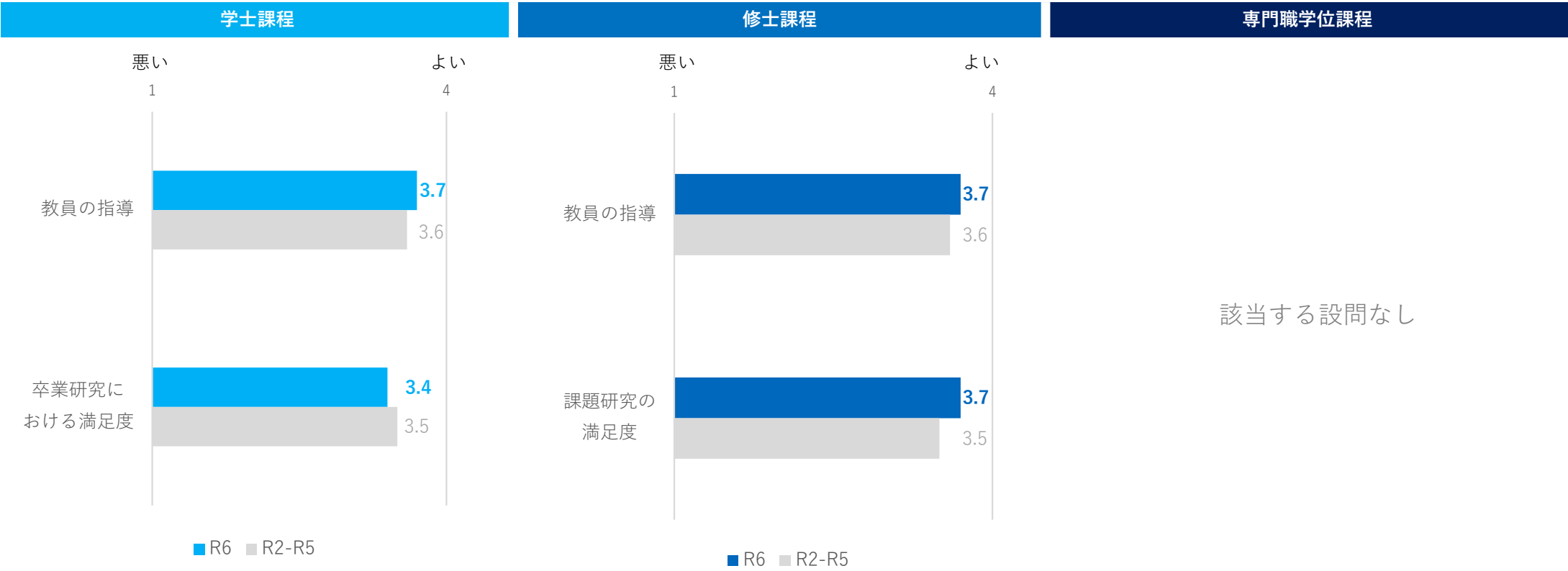


「教育実践コア科目」3.3はR2-R5の平均3.3と同水準だった。

「教職実践演習」3.4はR2-R5の平均3.3から上昇した。

両科目の有用感とともに、R2以降、高い水準を維持している。

卒業研究／課題研究における教員の指導、満足度について、
4件法での回答を求め、「よい」=4点、「どちらかといえばよい」=3点、「どちらかといえば悪い」=2点、「悪い」=1点として平均値を算出した。



「**教員の指導**」はR6で3.7となっており、R2-R5の平均3.6を上回っている。

「**卒業研究における満足度**」はR6で3.4であり、R2-R5の平均3.5よりわずかに低い傾向が見られる。

「**課題研究における教員の指導**」はR6で3.7と、R2-R5の平均値である3.6から微増していた。

一方、「**課題研究における満足度**」はR6で3.7と、R2-R5の平均値である3.5から上昇しており、課題研究に関する評価は向上していたと言える。

教育環境に係る7項目（「講義室・体育館等の施設について」「椅子・机・PCの学習機材の設備について」「図書館の蔵書・環境について」「大学内におけるゼミ室等個別的学習環境について」「事務窓口の対応について」「大学が企画・主催する行事の質について（例：ガイダンス等）」「大学が企画・主催する行事の時期及び期間について」「大学全体における学習環境について」）に4件法での回答を求めた。
「高い」=4点、「どちらかといえば高い」=3点、「どちらかといえば低い」=2点、「低い」=1点として平均値を算出した。

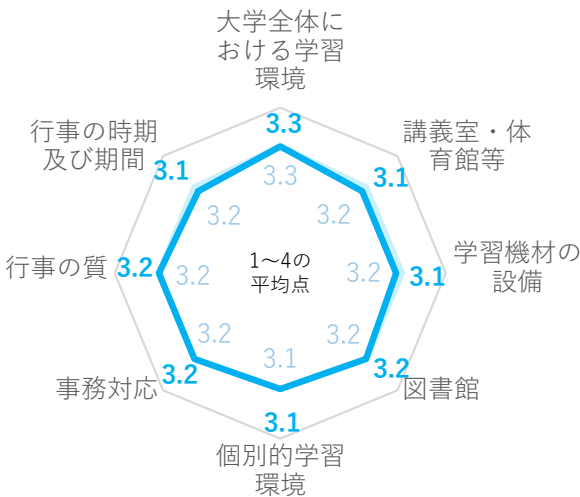


学士課程

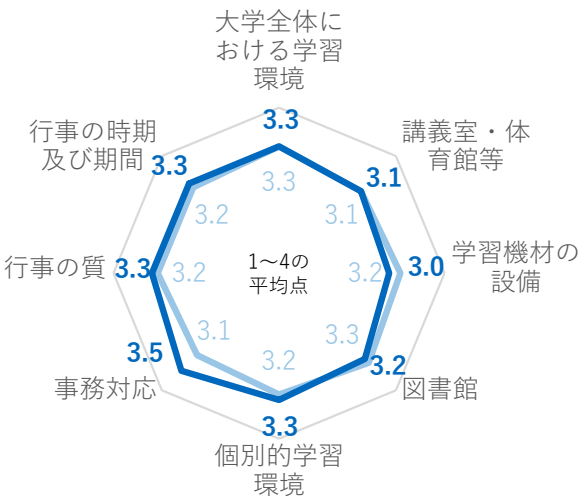
修士課程

専門職学位課程

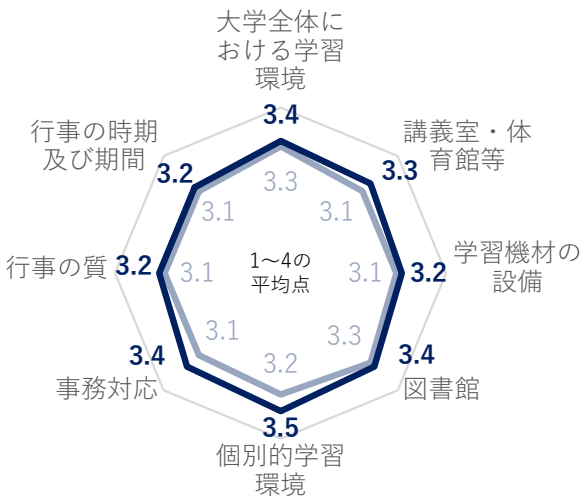
— R2-R5 — R6



— R2-R5 — R6



— R2-R5 — R6



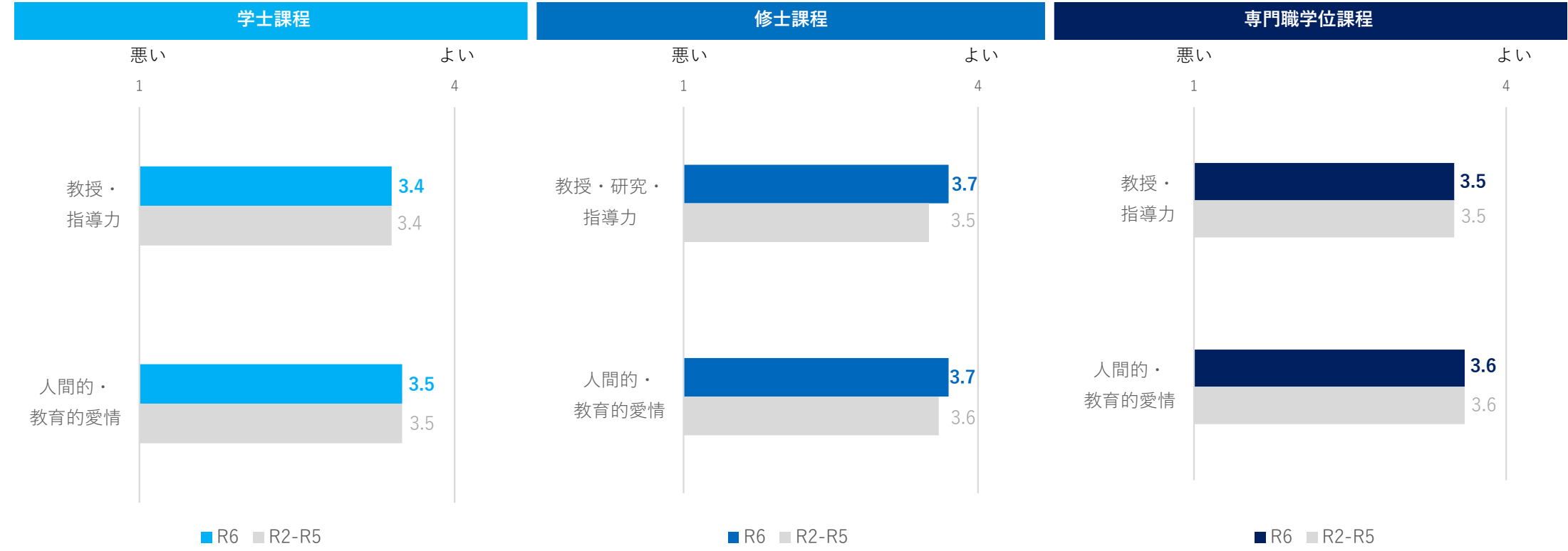
全8項目において3.2前後と概ね安定的な評価を得ている。
しかしながら、「講義室・体育館等」「学習器材」「行事」については、過去4年間（R2-R5）と比較して微減しているため、自由記述も参考にする必要がありそうだ。

R6においては、R2-R5までの平均と比較すると、「事務対応」への評価が最も大きく（0.4ポイント）向上していた。「個別的学習環境」、「行事の質」、「行事の時期・期間」も微増していた。
一方、「学習器材」や「図書館」は微減し、「施設」と「大学全体における学習環境」は横ばいであった。

R6は多くの項目でR2-R5の平均値を上回った。具体的には、「事務対応」、「講義室・体育館等の施設」などで評価が向上している。
特に「個別的学習環境」は、R6で3.5と最も高い評価を得ている。

「大学教員について」（学士：「大学教員の教授・指導力について」修士・専門職：「大学教員の教授・研究・指導力について」学士・修士・専門職：「大学教員の人間的・教育的愛情について（親身になってくれるか、勉学等に関し愛情をもって時には厳しく、時にはやさしく接したか等）」）2つの質問に4件法での回答を求めた。

「よい」=4点、「どちらかといえばよい」=3点、「どちらかといえば悪い」=2点、「悪い」=1点として平均値を算出した。



「大学教員の教授・指導力」は3.4であり、R2-R5平均の3.4と同水準だった。

「大学教員の人間的・教育的愛情」は3.5で、過去の3.5と同水準だった。

「大学教員の教授・研究・指導力」はR6で3.7となり、R2-R5の平均値である3.5より上昇していた。

「大学教員の人間的・教育的愛情」もR6で3.7となり、R2-R5の平均である3.6からわずかに上昇していた。

よってR6においては、大学教員の総合的な質に対する評価が、過去4年間の平均と比較して、向上していることが示唆された。

R6の「大学教員の教授・研究・指導力」は3.5となり、R2-R5平均の3.5と同レベルだった。

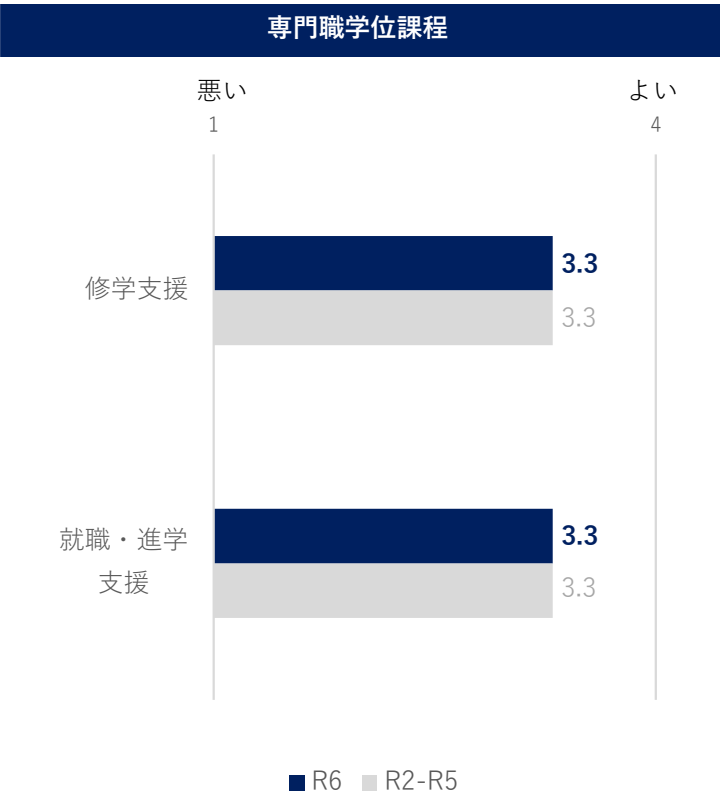
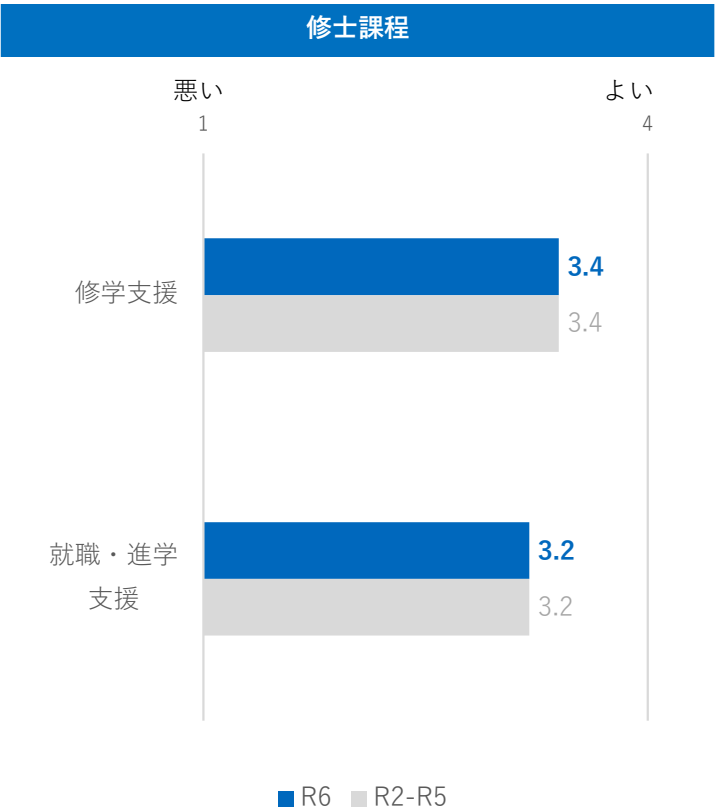
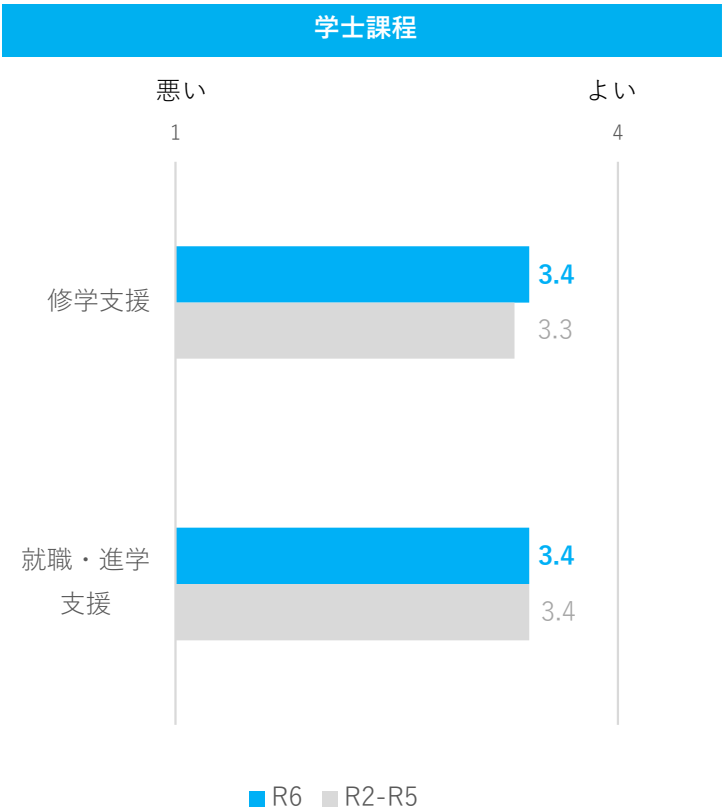
一方、「大学教員の人間的・教育的愛情」は3.6となり、R2-R5平均の3.6と同レベルだった。

総じて、R6における大学教員の教授・研究・指導力および人間的・教育的愛情に対する評価は、過去数年の平均と同等かそれ以上の高い水準を維持していると言える。

11 学生支援



学生生活に係る質問（修学支援、修了後に向けた就職・進学・復職支援）について、4件法での回答を求めた。
「よい」=4点、「どちらかといえばよい」=3点、「どちらかといえば悪い」=2点、「悪い」=1点として平均値を算出した。



「**修学支援**」は、R6の評価が3.4となり、R2-R5の平均の3.3から微増しているように見える。しかし、R5のよい・どちらかといえばよいの合計をみるとほぼ変化がないため、ほぼ同じ水準といえる。

「**就職・進学支援**」は、R6が3.4でR2-R5平均と同じ水準だった。

「**修学支援**」について、R6の評価は3.4であり、R2-R5の評価の平均値と同じであった。

「**修了後に向けた就職・進学支援**」についてもR6の評価は3.2で、R2-R5の評価の平均値と同じであった。

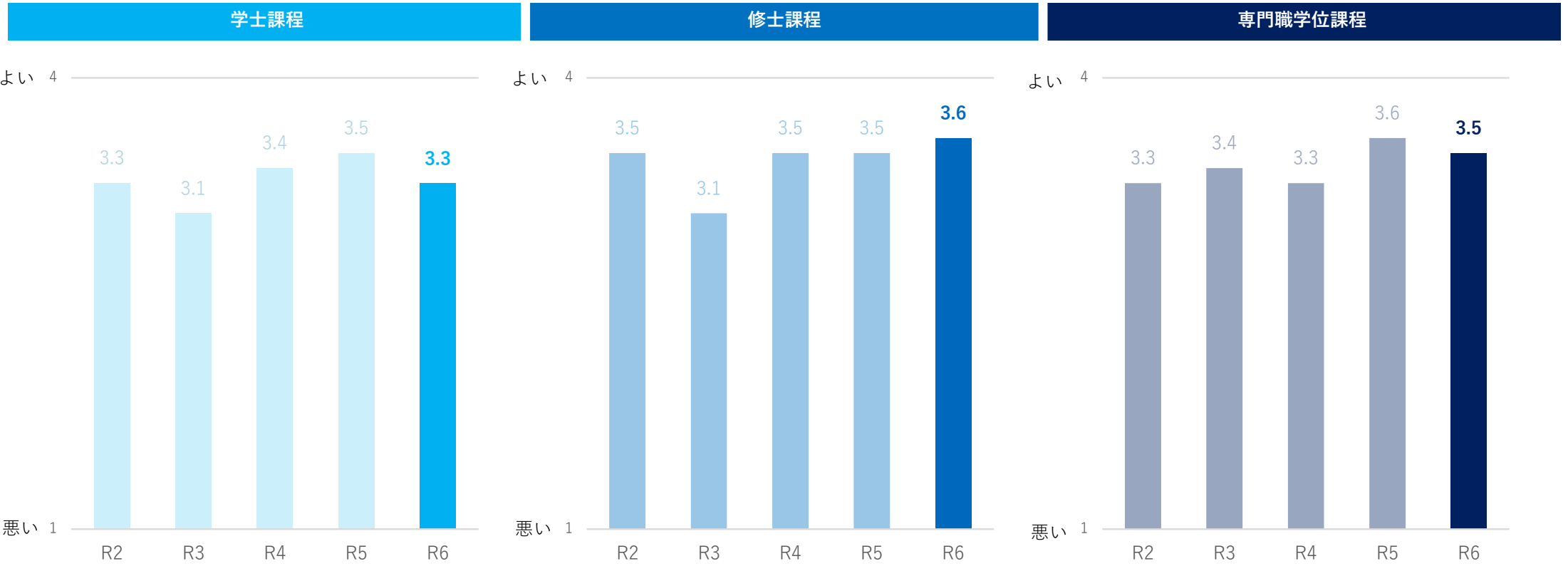
これらの項目に関しては、過去4年間と比較して大きな変化は認められず、評価は横ばいとなっていた。

R6における「**修学支援**」と「**修了後に向けた就職・進学支援**」の評価はいずれも3.3だった。これはR2-R5平均の3.3と同水準だった。

12 本学で学んだ成果：教育内容に対する理解

本学で学んだことの成果（教育内容の理解度）について、4件法で回答を求め、「よい」=4点、「どちらかといえばよい」=3点、「どちらかといえば悪い」=2点、「悪い」=1点として平均値を算出した。

*この項目は、分析の総括で「全体の満足度」として使用



R6の評価は3.3だった。
これは過去の経年推移を見ると、R5の3.5と比較して少し低下しているが、過去5年間（R2-R6）は3.1から3.5の間で推移しており、R6は変動内の変化といえる。したがって、R6は「教育内容の理解度」について、過去数年と比較して評価がほぼ変わらない傾向が見られる。

「教育内容の理解度」について、R6は3.6で、R2-R5の平均値である3.5よりわずかに上昇し、調査期間（R2-R6）の中で最も高い数値を示していた。経年推移を見ると、R3で落ち込んでいた評価が回復し、R4-R6では理解度が高まっていることが示された。

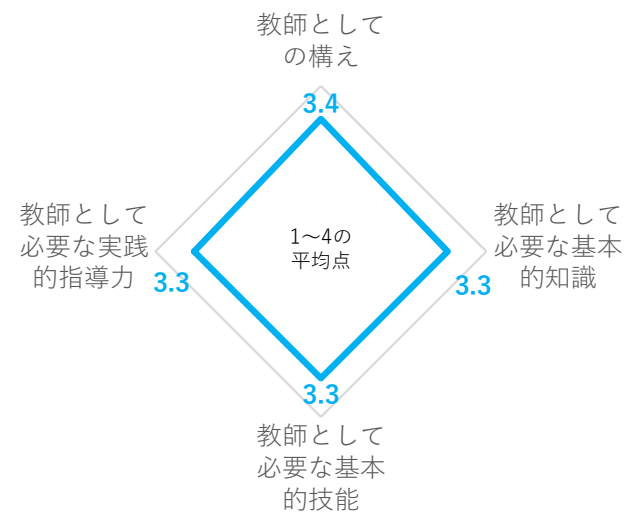
「教育内容の理解度」は教育内容の理解度を示している。R6の数値は3.5だった。経年推移を見ると、R5で3.6と大きく上昇しており、R6の3.5はR5よりはやや低いものの、R2からR4の数値（3.3～3.4）と比較すると高い水準を維持していると言える。これは、教育内容の理解度が直近の2年間で向上傾向にあることを示唆している。

13 本学で学んだ成果：教師としてのコンピテンシー

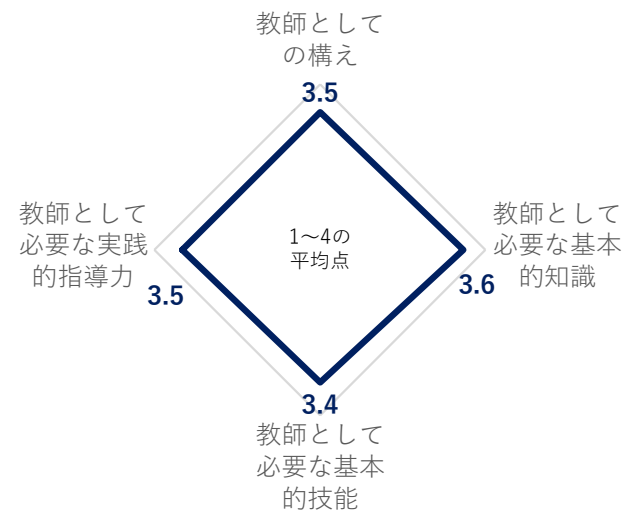
本学で学んだ成果として教育的資質の修得（「教師としての構え（教育観、使命感、人権意識等）」「教師として必要な基本知識（教職・教科・領域等に関する知識）」「教師として必要な基本的技能（個人指導、集団指導、学級経営等）」「教師として必要な実践的指導力（学習指導力、生徒指導力、特別な支援を必要とする子供への対応力等）」）に対して、学士・修士課程では5項目、専門職学位課程では2項目を4件法で回答を求めた。
「身に付いた」=4点、「どちらかといえば身に付いた」=3点、「どちらかといえば身に付いていない」=2点、「身に付いていない」=1点として平均値を算出した。



学士課程	修士課程	専門職学位課程
------	------	---------



該当する設問なし



- 「教師としての構え」：3.4
- 「教師として必要な基本的知識」：3.3
- 「教師として必要な基本的技能」：3.3
- 「教師として必要な実践的指導力」：3.3

「教師としての構え」が3.4と他の項目より少しだけ高い成果を示している。

- 「教師としての構え」：3.5
- 「教師として必要な基本的知識」：3.6
- 「教師として必要な基本的技能」：3.4
- 「教師として必要な実践的指導力」：3.5

特に「教師として必要な基本的知識」が3.6と他の項目よりやや高い数値を示している。

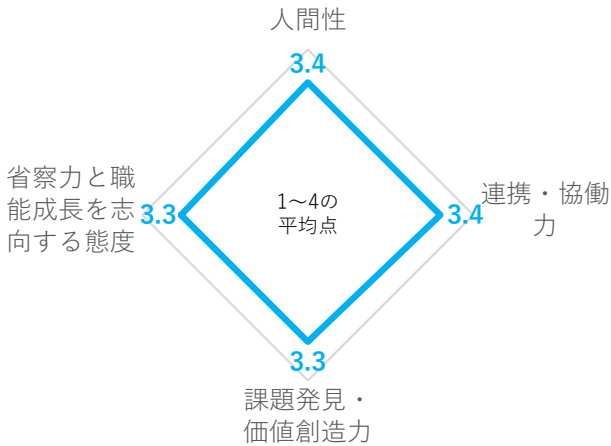
14 具体的な成果：社会で活用できる汎用的なスキル

本学で学んだ成果として汎用的資質の修得（学士課程・専門職学位課程：「人間性（主体性、自己肯定感、困難を乗り越え回復する力、多様性への感受性等）」「連携・協働力（コミュニケーション力、チームワーキング力、合意形成力）」「課題発見・価値創造力（データ活用力、多面的・多角的な見方・考え方、論理的思考力等）」「省察力と職能成長を志向する態度（学び続ける態度、自己調整力等）」修士課程：「専門領域における」「人間性（主体性、自己肯定感、困難を乗り越え回復する力、多様性への感受性等）」、「連携・協働力（コミュニケーション力、チームワーキング力、合意形成力）」「課題発見・価値創造力（データ活用力、多面的・多角的な見方・考え方、論理的思考力等）」「省察力と職能成長を志向する態度（学び続ける態度、自己調整力等）」）に対して、学士課程・専門職学位課程では4項目、修士課程では5項目を4件法で回答を求めた。

「身に付いた」=4点、「どちらかといえば身に付いた」=3点、「どちらかといえば身に付いていない」=2点、「身に付いていない」=1点として平均値を算出した。



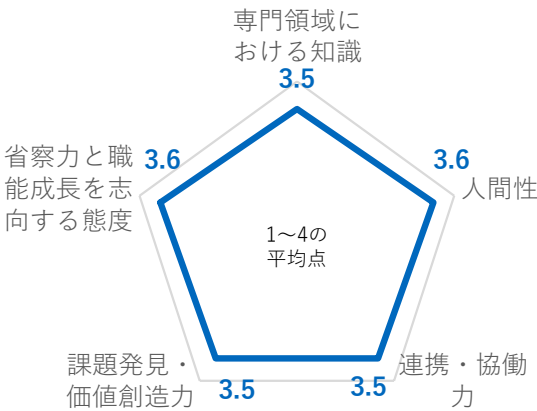
学士課程



- 「人間性」：3.4
- 「連携・協働力」：3.4
- 「課題発見・価値創造力」：3.3
- 「省察力と職能成長を志向する態度」：3.3

特に「人間性」、「連携・協働力」の項目が、身についたという肯定的な意見が5~10%多いため、他の項目より少しだけ高い成果を示している。

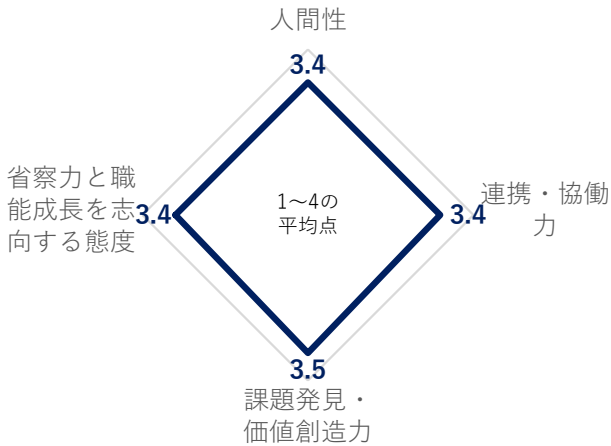
修士課程



- 「専門領域における知識」：3.5
- 「人間性」：3.6
- 「連携・協働力」：3.5
- 「課題発見・価値創造力」：3.5
- 「省察力と職能成長を志向する態度」：3.6

学んだ成果に関するスコアは全て3.5以上であり、高い評価を得ていると思われる。

専門職学位課程



- 「人間性」：3.4
- 「連携・協働力」：3.4
- 「課題発見・価値創造力」：3.5
- 「省察力と職能成長を志向する態度」：3.4

特に「課題発見・価値創造力」が3.5と他の項目よりやや高い数値を示している。

15 教育の有用性に対する実感

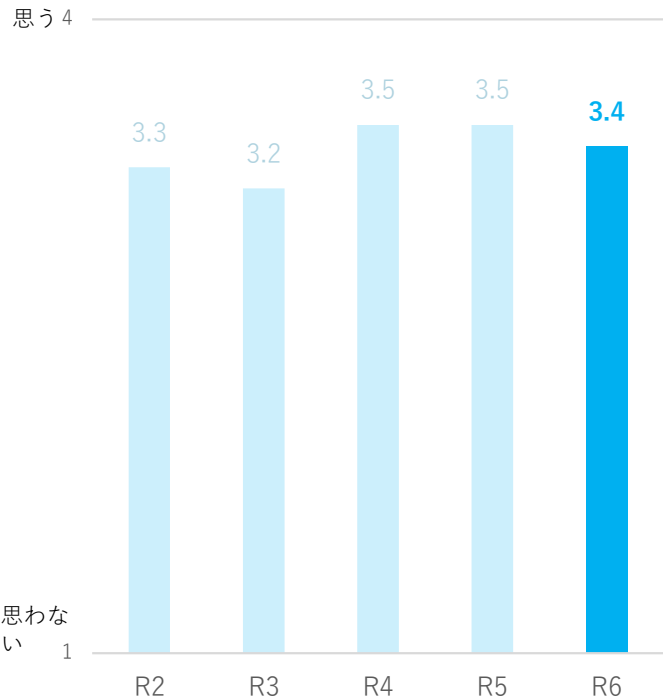
学士課程・修士課程：「社会に出て、本学の教育内容が役立つと思いますか」に対し、4件法で回答を求め、「思う」=4点、「どちらかといえば思う」=3点、「どちらかといえば思わない」=2点、「思わない」=1点として各年の平均値を算出した。

専門職学位課程：「教育内容の満足度」に対し、4件法で回答を求め、「満足」=4点、「どちらかといえば満足」=3点、「どちらかといえば満足ではなかった」=2点、「満足ではなかった」=1点として各年の平均値を算出した。

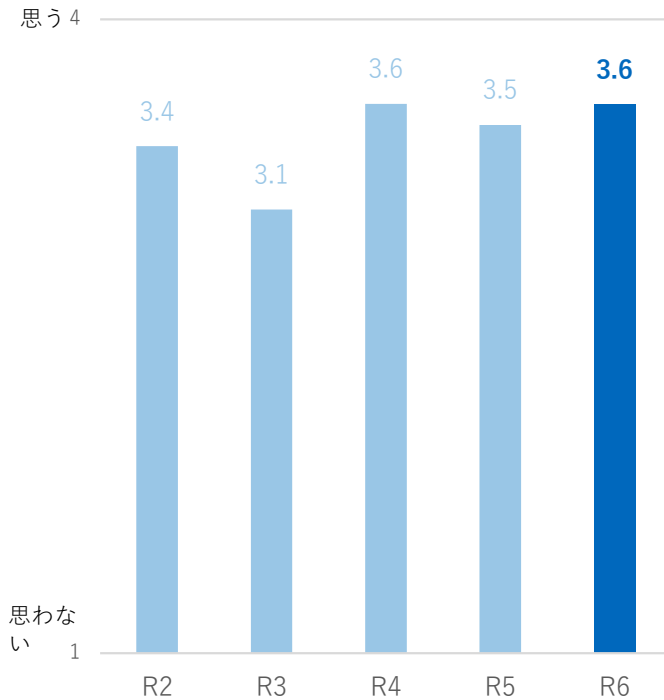


*この項目は、分析の総括で「全体の満足度」として使用

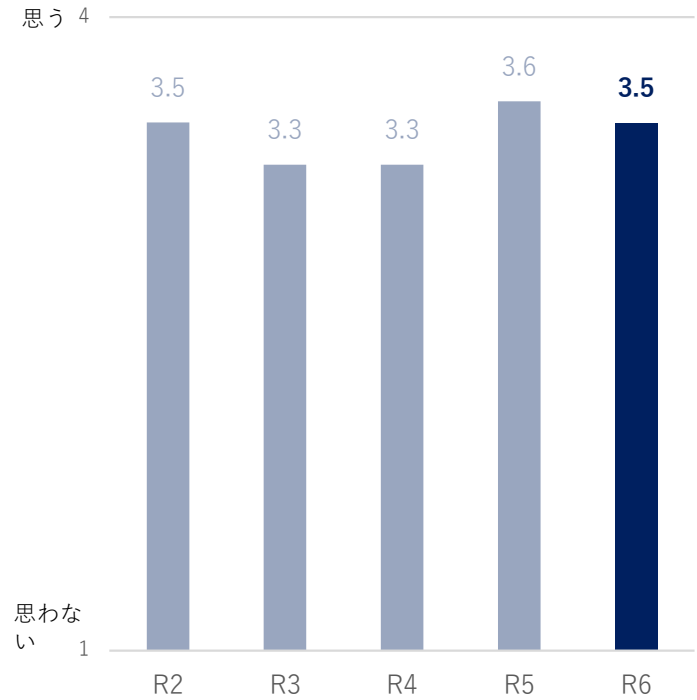
学士課程	修士課程	専門職学位課程
------	------	---------



R6の評価は3.4だった。R6の評価は前年度（R5）の3.5からわずかに低下した。しかし、この3.4という数値は過去5年間（R2-R6）の中での3.2以上を維持しているため、ほぼ同評価を得ているといえる。



R6における評価は3.6であった。経年推移を見ると、R2は3.4であったのが、R3には3.1と一時的に低下したものの、R4には3.6まで回復し、R5は3.5に微減、R6には3.6と再び微増し、過去5年間（R2-R6）でR4と並ぶ最高値を示した。このことより、修士課程の教育内容が社会で有用であると認識されており、その評価が高い水準を維持しているといえる。



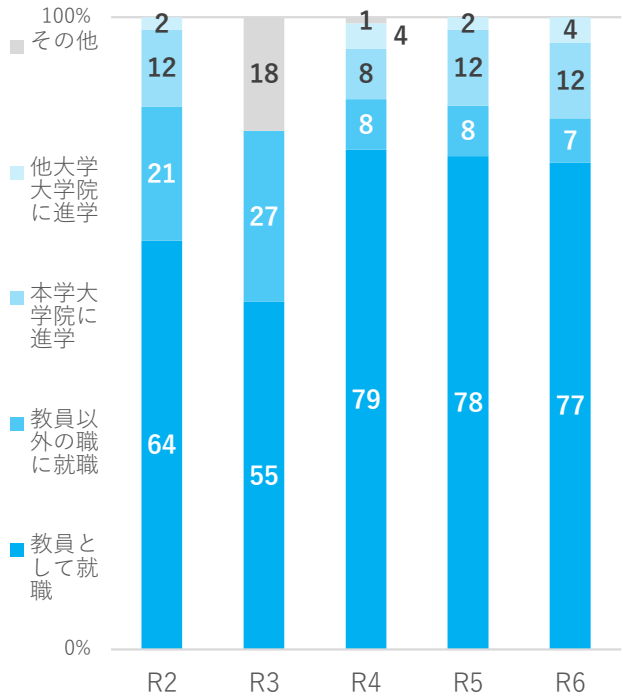
R6は3.5となっている。これは過去の推移を見ると、最も高かったR5の3.6からはわずかに低下している。しかし、R2の3.5と同水準であり、R3、R4の3.3よりは高い結果だった。経年で見ると、R3、R4で一度低下した後、R5で大きく改善したが、R6ではその高い水準を維持しつつ、やや落ち着いた値になったといえる。

16 卒業後・修了後の進路

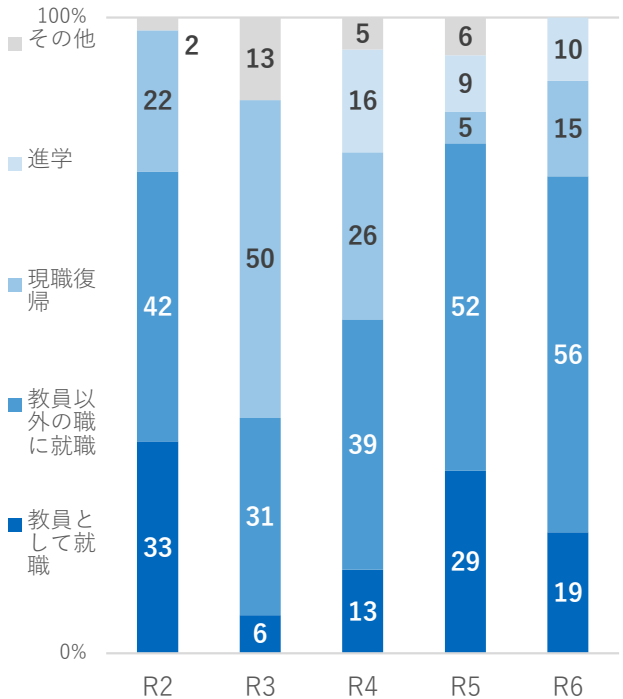
卒業・修了後の進路予定を単一回答でたずね、各年の結果を構成比で示した。



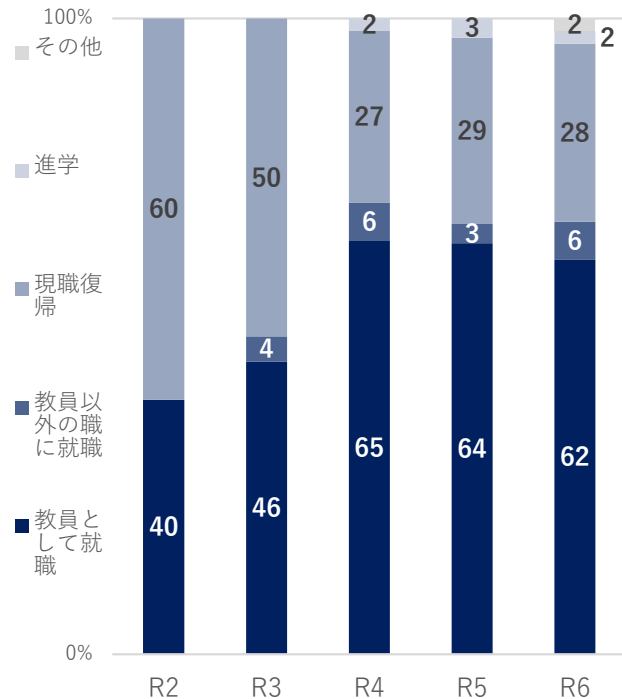
学士課程



修士課程



専門職学位課程



R6は、「**教員として就職**」が77%と非常に高い割合を占めている。過去5年間（R2-R6）でみてR4(79%)、R5(78%)に匹敵する高い割合であり、R2(64%)、R3(55%)から25%程度と大幅に増加し、教員志向の強さが継続している。

この結果に対照的に、「**教員以外の職に就職**」がこれまでの20～25%程度から7%へと低く推移し、R4からその傾向が続く。大学院への進学率（R6 本学12%・他大学4%）の傾向は変わっていない。

経年推移を見ると、特に「**教員以外の職に就職**」の割合が顕著に増加しており、R6では56%と、R5の52%からさらに4ポイント増加し、過去5年間（R2-R6）で最も高くなっていた。

一方、「**教員として就職**」は19%、「**現職復帰**」は15%、「**進学**」は10%に留まっていた。以上から、R6においては教員以外の進路を選択する傾向が過去に比べてさらに強まったと言える。

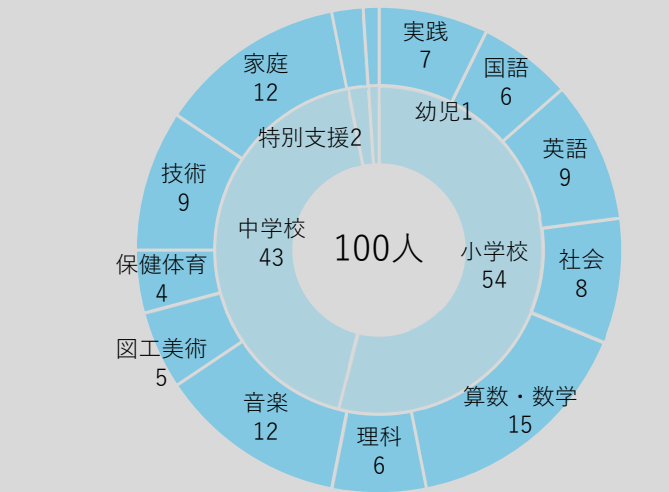
R6の回答を見ると、最も多い進路は「**教員（正規・非正規問わず）として就職**」で62%を占めている。次いで「**現職復帰**」が28%だった。

経年推移では、R2・R3は「**現職復帰**」が多数を占めていたが、R4以降は「**教員として就職**」が多数派となっており、R6もこの傾向が継続している。また、「**教員以外の職に就職**」がR6は6%と、経年で見て増加傾向にあり過去最高の割合となった。

参考データ：回答者の所属専修・コース内訳

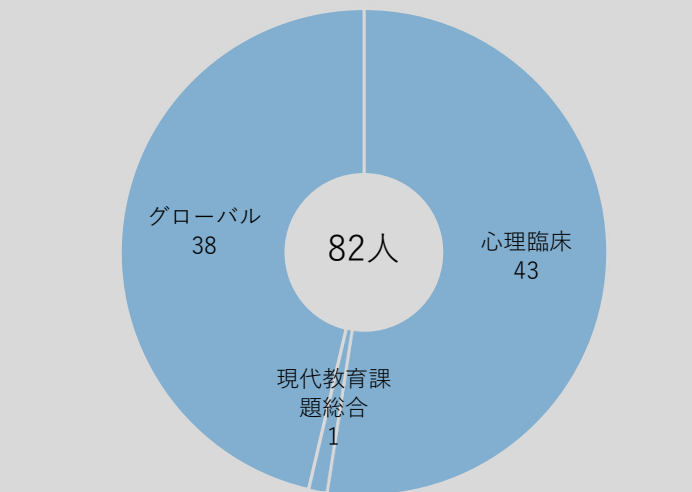
回答者の少ないコースの結果は全体に与えるウェイトが低いため、大学全体の結果としての解釈の妥当性に若干の留意が必要である。

学士課程



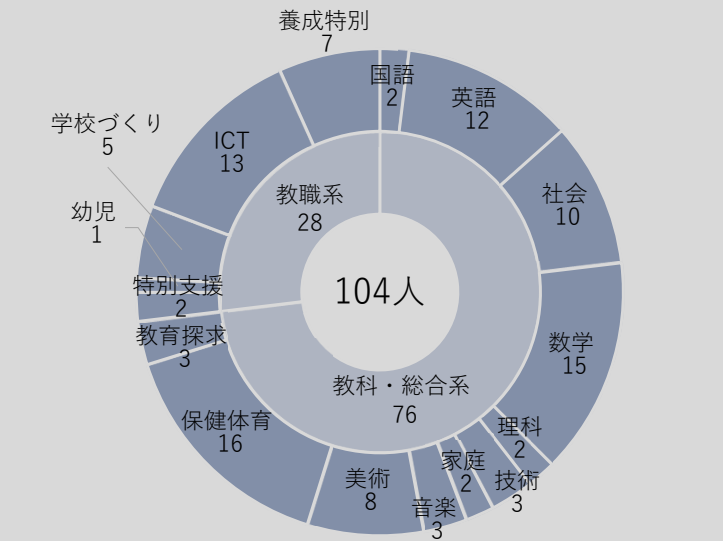
専修・コース	回答数	構成比
幼児教育専修	1人	1%
小学校教育専修	54人	54%
中学校教育専修	43人	43%
学校教育実践コース	7人	7.2%
国語科教育コース	6人	6.2%
英語科教育コース	9人	9.2%
社会科教育コース	8人	8.2%
算数・数学科教育コース	15人	15.5%
理科教育科コース	6人	6.2%
音楽科教育コース	12人	12.4%
図画工作・美術科教育コース	5人	5.2%
体育・保健体育教育コース	4人	4.1%
技術科教育コース	9人	9.3%
家庭科教育コース	12人	12.4%
無回答	4人	4.1%
特別支援教育専修	2人	2%
計	100人	100%

修士課程



専修・コース	回答数	構成比
心理臨床コース	43人	52.4%
現代教育課題総合コース	1人	1.2%
グローバル教育コース	38人	46.4%
計	82人	100.0%

専門職学位課程



専修・コース	回答数	構成比
教科・総合系	76人	73.1%
国語科教育コース	2人	2.6%
英語科教育コース	12人	15.8%
社会科教育コース	10人	13.2%
数学科教育コース	15人	19.7%
理科教育コース	2人	2.6%
技術・工業・情報教育コース	3人	4%
家庭科教育コース	2人	2.6%
音楽科教育コース	3人	3.9%
美術科教育コース	8人	10.5%
保健体育科教育コース	16人	21.1%
教育探究総合コース	3人	4%
教職系	28人	26.9%
特別支援教育コース	2人	7.1%
幼児教育コース	1人	3.6%
学校づくりマネジメントコース	5人	17.9%
生徒指導コース	0人	0%
学修指導力・ICT教育実践力開発コース	13人	46.4%
教員養成特別コース	7人	25%
計	104人	100%